

半歩未来の 大学改革私論

放送大学学園理事長・早稲田大学学事顧問

白井 克彦

第5回

グローバル人材の育成と 大学の国際化

留学生の受け入れも 海外留学も進まない日本

大学の国際化は大学改革の中心課題の一つである。その目的は、海外の大学との交流によって大学自体の教育、研究に留学生を確保すると同時に、「国際的で多様なプログラムを導入し、レベルの向上を図ること」「国際的な場で働ける若人を育成すること」にある。その実現への課題は、留学生の受け入れと送り出しに伴う外国の大学とのさまざまな交換プログラムの設定と協定であった。海外に学生を送り出すために、外国語訓練の施設を設けた大学も少なくない。

2009年ごろから国の産業競争力を増すために、グローバル人材育成の要望が急速に高まり、さまざまな国際化プログラムが開発されてきた。しかし、学生の内向き志向などもめだち、グローバル対応が進まないことが社会的に大きな問題として取り上げられてもいる。

世界の学生の活動が急速に増大する

のに比べて、日本の場合は、大変偏った傾向が見える。まず、日本が受け入れている留学生は中国が最も多く、アジア諸国が大部分である(図表)。留学生30万人計画はあるが、現状は十数万人で停滞気味である。この原因は、アジアの大学もかなり整備されてきたことと、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパ等の大学に比べて、経済力や技術力を背景とした日本の大学の優越性が低くなってきたことがあげられる。

他方、日本から送り出す学生は、昔は大部分が、北米、ヨーロッパ諸国であり、アジアは少数であった。現在は、経済の発展と共に、日本からアジアに向かう留学生が増加した。しかし、北米への留学生は激減するなど、留学生の全体数は伸び悩んでいる。

この原因は、経済的理由も大きい。一言でいえば、日本の若者が将来に対する世界観を持っていないということにある。世界の産業や社会展開と日本の関わりがどうなるか、あるいはどのような方向をめざすべきなのか

ついて、ほとんど考えていない。

グローバル人材の育成が強く求められる理由は、グローバル企業からの要請にある。しかし、これからの日本がグローバル化を強力に進めなくてはならないのは、グローバル企業だけの問題ではない。国際社会で日本がどのような役割を果たし、地位を確保しようとするのか、日本の各地域社会がグローバル社会とどう関わるのか、大学は世界の高等教育にどのように位置付けられたいのかなど、グローバル化は全てに関係している。そのイメージの共有なしに、学生がグローバル化に向けて進もうとするであろうか。

いずれにしても急速な環境の変化に対応して、近未来に、日本の大学がどうすべきかは重要である。以下、具体的に4つのポイントを列挙する。

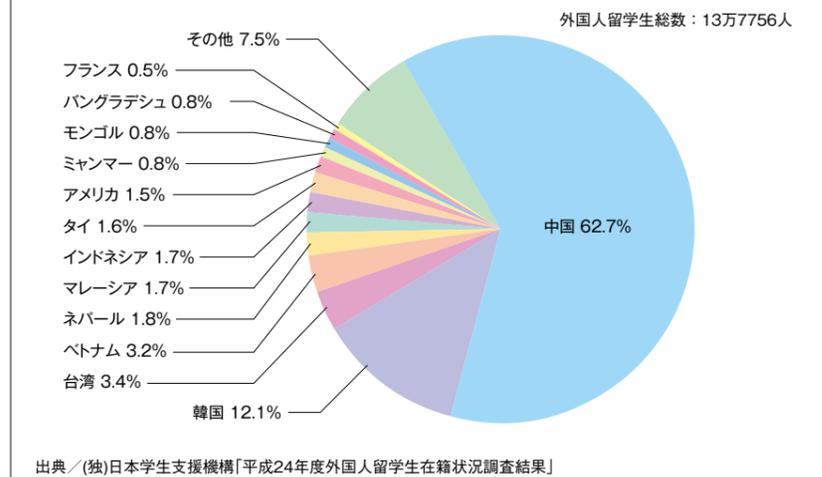
1. グローバル人材に 必要な能力の育成

日本人の外国語能力の不足については、長く論じられてきた。ようやく、小学校の段階から、英語教育を強化することが進められつつある今、大学としてできることは、入学試験の改善である。現在の、読む、書くを中心とする英語の試験から、聴く、話す能力のテストを加えたものにより、高校以下の英語教育が直ちにその要素を反映することになるであろう。

大学に入学してからも、相当な注力が必要となる。個々人が英語を中心とする外国語の総合能力を高めるために、目標とするレベルの設定を行う。同時に、現在のTOEFLやTOEICなどよりも、一層細かい外国語運用能力に関する分析テストを開発し、自分に適切な学習内容・方法を選択できるようにする。そうすれば、日本人の外国語習得も効率的にできる。

次に専門分野に加えて歴史、地理、

図表 外国人留学生の出身国割合



文化など「日本」のことを英語で表現し、議論できるようにすることである。さまざまな国の人々と共に働くには、専門分野の知識を深めると同時に、幅広い共通の話題を持てることが大切である。そのためには、これらを英語で学習し、議論する訓練が極めて重要である。

一般には英語による授業は多くない。これを補うには、英語による優れた授業をコンテンツ化し、それを流通させて全大学の学生が受講し、これに基づくセミナーなどにより、単位修得を可能にすることが有効である。さらに、外国人と接する機会を増やす必要がある。外国からの留学生との寮生活の共有、海外の大学とのインターネット利用によるテレビ会議やチャットによる共同ゼミなど、比較的低コストでも有効な方法は多く存在する。

2. 留学生送り出しの プログラムの整備

大学は、留学をカリキュラムの中に位置付けて、その意義を明確にすることが大切である。長期、短期、専門性など目的と費用に応じて、さまざまな留学プログラムを設定しておきたい。

まず、可能な限り異文化に実際に接することが必要である。

中身としては、第一に効果的な留学を実現する留学前プログラムを設定し、現地の滞在を有意義なものとする。大学が海外に施設を持ち、まとめて学生を送るプログラムは、最適なものを用意でき安全であるなどのメリットもある。しかし、留学で十分な効果を得るためには学生ごとに目標を立て、それに合った大学に送り込むことが重要であろう。

第二は、留学後のフォローのプログラムを設定し、留学で得たものを拡大できる場面をつくる。留学は、学生たちに非日常の強い刺激を与える。外国語以外にも多くのことを学んで、留学前とは異なる意欲を持って帰ってくる人が多い。そのような学生が自発的に将来の仕事を含めた目標を定めて取り組める環境をつくることである。

3. 留学生の 受け入れ体制

さしあたりグローバル大学を中心に、留学生を2倍程度受け入れることが目標となる。日本の若年者労働力の不足を補って、日本社会の活力を維持

するには、大学生の10%、30万人程度の受け入れが不可欠だからである。グローバル大学では30%以上を目標とすべきである。このためには、先述のとおり中心となる授業は全て英語で行うことと、留学生が滞在しやすい寮の整備など、日本人と留学生を区分しない教育と研究の環境整備を急速に推進する必要がある。

グローバル大学と見なせる大学は、全体の1~2割程度と考えられるが、そこでは、教職員も30%以上は外国人とすることが必要になるであろう。

4. 日本の大学の グローバル化への道

現在、スーパーグローバル大学事業をはじめ、先陣を切ってグローバル化を進めようとする大学が現れている。そこでは全学生、教職員の30%以上の外国人を受け入れながら、レベルを高めなければならない。さらに、グローバル大学は教育プログラムを実行する海外の拠点を、海外の大学との連携を含めて設置していく必要がある。

すでに、欧米の大学は世界でさまざまな形でグローバルキャンパスを展開し、存在感を示している。日本の大学も何か策を考えないと、世界から優秀な学生を獲得することはできない。

しかし、日本の現状を考えると、今、一般の大学がグローバル大学に変わらなければ、将来の日本を支える日本人および外国人の人材は育てられない。それは、単にグローバル社会で生きていけるというだけでなく、グローバル社会にいかに関与できるかを考え、リードする意欲と能力を養うことである。寮をはじめ施設の不足、教職員の能力不足など多くの問題が山積している。各大学はそれぞれにステップをふんで、具体的に計画を実行しなくてはならないのである。